



岷江入楚

自宮

弟四十一

特別  
~12  
4604  
41



• 82  
A12  
4604  
41



自兵部上官 秋以卷上り世里者年三

小江文庫

十四歳 世里後 句文十五歳

光原後御方 御方分司

三官御之服 後号冬上り文部

少曹右大臣 後一系文お花 前里臣用事

一系官与三系殿 毎月十五日 通任侍事

世里者為院 院侍子 上院之服事

今年二月 任侍事

十五歳

十六歳 秋任右近中將又任宰相

秋任侍從 任右近中將事

院侍給加階事

源中將比鼠院中設南司事

四十二歳 侍合仙侍行事

源中將 勤去身 昨六系院 以子事

源中將 五系高事

秋の陰日に任中ねし  
十四の年の秋より事

句書下宮花花香紙中

十七歳

十八歳

十九歳 秋任中納言

董中納言中納言之位中

以美詞之十九よりありて之位の事なりて中納言と  
を好むなりと云ふいふの宰相中納言といふ可  
なりと云ふ位よりなりけりなりと中納言と  
たのふと云ふのよりなりけりなりと中納言の位  
官ありてなりけりなりと中納言の位  
のよりなりと云ふなり

句書下宮花花香紙中

董中納言中納言之位中

以美詞之十九よりありて之位の事なりて中納言と  
を好むなりと云ふいふの宰相中納言といふ可  
なりと云ふ位よりなりけりなりと中納言と  
たのふと云ふのよりなりけりなりと中納言の位  
官ありてなりけりなりと中納言の位  
のよりなりと云ふなり

句書下宮 或句書一名董中納言何れも春名

物記をいれぬ人なりと云ふなりけりなりと中納言と云ふなり  
くひひつてけりなり 董中納言之有る位なり  
や限のは董中納言の年紀を云ふなり  
い春よりなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり  
十九よりなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり  
の位なり

秘

春名次同号之句書下宮と云ふなり又董中納言と云ふなり  
柳中納言と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり  
知れ別傳何れなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり  
人の遊云のよりなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり  
さる但作之の或なりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり  
しるなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり  
以るなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり  
元通之相董中納言と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり  
このや限の中納言と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

百十四帖等亦有赤字門の又お好みのるし終り  
い伝るし由すくわさるありとて早一竟いや伝に在り  
らりて不書ん記可れとれ物伝一部のうらうと衣  
傷をつけんふ海くそわつこりいかりり傳に  
崩壊のるをさるゆと伝も及へうす又お好し海  
のるありしは略を仰えの近向言し言え

幻卷といふ文の其との同九年ありやい卷といひ  
量の身軀をとり年記をとりて幻卷といひ六歳  
今年十四年といふ服のるわり六歳といひ十三歳ま  
てのるいや伝の中よりゆりりさる也わつてやどりこの  
其おと年記雜記をとり別よさる也りたるし十四歳  
しり十九歳といふのをもとりてわれしとて其れ巻を  
のるありしり

<sup>要</sup>い卷幻卷の次をとり量二月に服とわらる九ヶ  
月之量と幻卷といふ其の娘も十四歳といわりい卷  
系ハカヤのるありあり

量十四歳とて二月に服するの秋中お任ス又十九歳  
とて之位らねし任りあり以下の並書と并に伝に  
いといふ卷と混乱をさるあり別抄あり  
先や伝巻ありあり  
い卷の三冊其の略し又秘あり

史記に於ては

古条院崩御アリ

文全康秀

源氏のふかしの山國に  
東より西へ流るる河に  
光孝天皇崩御の御代に  
皇孫の御代に

源氏崩御の御代に

源氏の御代に

源氏の御代に

源氏の御代に

源氏の御代に

源氏の御代に

源氏の御代に

源氏の御代に

源氏の御代に

源氏の御代に

此泉院を源氏の御代に

源氏の御代に

源氏の御代に

源氏の御代に

源氏の御代に

源氏の御代に

源氏の御代に

源氏の御代に

源氏の御代に

源氏の御代に

源氏の御代に

源氏の御代に

源氏の御代に

源氏の御代に

源氏の御代に

源氏の御代に

源氏の御代に

源氏の御代に

源氏の御代に

源氏の御代に



女一宮は桑院の足利の町乃東のこころ

女一宮は桑院と一服は桑とふしふくれゆあては桑

院の東の桑とて世の山と門といわたりたす位ゆへて

紫上の四方 女一宮のゆへて

新しよこいひ

紫上のる又深とともふし 紫上のる

二宮もゆへて存のるえぬを

二宮の同胞のえぬ

二宮と桑院と一服は桑とて付分は桑院

の寢ぬを清休はして夕暮のたえはの中

をもしんゆへて

中老いせ井居りて

太のゆへにのちいひ

夕暮りて

ほこのゆへに

ゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに

らの書文は信よゆへにゆへにゆへに

ゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに

大よのゆへに

夕暮りて

ついでにゆへに

いひゆへにゆへにゆへにゆへに

大娘をいひゆへにゆへにゆへに

きゆへにゆへに

ゆへにゆへに

いひゆへに

ゆへにゆへにゆへにゆへに

ゆへにゆへに

ゆへにゆへに

ゆへにゆへにゆへにゆへに

ゆへにゆへにゆへにゆへに

ゆへにゆへにゆへにゆへに









美し和道云  
各在任分  
羽林ノ事  
不三ノ記  
存字云

自侍後年中ニ任羽林例

宇法園白頼通 長保五元元服同七八日侍後

此泉院御給也

此泉院御給也 位子叙少之 天長

此泉院御給也

此泉院御給也 位子叙少之 天長

此泉院御給也 位子叙少之 天長

此泉院御給也

此泉院御給也

此泉院御給也

此泉院御給也 位子叙少之 天長

此泉院御給也

此泉院御給也

此泉院御給也 位子叙少之 天長

此泉院御給也 位子叙少之 天長

此泉院御給也 位子叙少之 天長

此泉院御給也

此泉院御給也

此泉院御給也

此泉院御給也 位子叙少之 天長

此泉院御給也

此泉院御給也 位子叙少之 天長

此泉院御給也 位子叙少之 天長

此泉院御給也 位子叙少之 天長

此泉院御給也 位子叙少之 天長

此泉院御給也 位子叙少之 天長

此泉院御給也 位子叙少之 天長

此泉院御給也 位子叙少之 天長

此泉院御給也 位子叙少之 天長

此泉院御給也 位子叙少之 天長

あつりしり

公界の目よにそがまきりあつりしり  
むらむら林ねよとむらむら  
ね

そまのいしほけりしりおひらひら

廿三文也 朱菴の詩也

いそのでいり入りあを

廿五文也

いりわられしり

廿六文の書とよのりしりめとよめふとむらむら

わられしりよとよ

つあつりのちり

廿七文の兄才六帝隆文りり他版をむらむら

アたま向ま中むらむら皆明る中文のむらむら

いそめをむらむら

院東文るりしりしりしりしりしりしりしり

いりしりしりしりしりしりしりしりしり

おられしりしりしりしりしりしり

廿八文の中むらむらむらむらむらむら 側周

廿九文のむらむらむらむらむらむら

三十文のむらむらむらむらむらむら

三十一文のむらむら

三十二文のむらむらむらむらむらむら

三十三文のむらむらむらむらむら

三十四文のむらむらむらむらむら

秘伝流本

廿五文のむらむらむらむらむらむら

廿六文のむらむらむらむらむらむら

廿七文のむらむらむらむらむらむら

廿八文のむらむらむらむらむらむら

廿九文のむらむらむらむらむらむら

三十文のむらむらむらむらむらむら





かめさるるよきよし

可道を 柏木もんろうりしむらむら

秘 柏木 昇昇

世をへてとふいせん

昇 世はへてとふ

私量一生海いんかり末に春よわきこ星こり

内よもろく文の成るこは

秘 今上六女三不連おそくまう海をぬく 昇昇

きいの文りしむらむらおととそくまうめり

秘 鳴る申す

いさほりの文なる申す文いしむらむらおととそくまう

めりしむらむらおととそくまう

私りりしむらむら申す文りしむらむらおととそくまう

すくしむらむら

秘 量のるを海のぬらむら

院のぬらむら

秘 係がまよひ生れての量

本のおとく色

秘 必書

りしむらむらおととそくまう

係のぬらむら

ろわとぬらむらおととそくまう

秘 弘徹の太右三條大長

秘 係のぬらむら

源の性をいふ

秘 ありしむらむら 密字

等曰素系鳥并のぬらむらと日抄のすくしむらむら

わらしむらむらと係れらむらむら 年 密字

ほらしむらむらと世のぬらむら

こりしむらむらと朱権院の系文をいふ

院をいふとそくまうしむらむら

しむらむら



秘 右近のるる由京ありて是を仇を能くするに  
更上服をのこす能くするに能くするに能くするに  
のるるに 花を能くするに 能くするに

のりり母れはつと

秘 漢の元上香の事は元上香の事は元上香の事  
いふに元上香の事は元上香の事

この事いふに

秘 香の元上香の事は元上香の事

けしゆく

秘 香の元上香の事は元上香の事

かつたに

秘 香の元上香の事は元上香の事

香の元上香の事

秘 大品に元上香の事

元上香

秘 聖徳太子の事 一抱太子教月懐香故後宮争欲抱

及北亦加抱 異朝有例

まこと百歩の事

百歩香

うらまの事

秘 香の元上香の事

のりり母れはつと

秘 香の元上香の事

のりり母れはつと

秘 香の元上香の事

秘 香の元上香の事

秘 香の元上香の事

秘 香の元上香の事

秘 香の元上香の事

秘 香の元上香の事

秘 香の元上香の事

秘 香の元上香の事



しこの御女守りてありさし

御  
し川の号にあらはれし御女守りてありさし  
御  
御を業とせしむるは御女守りてありさし

御  
御中御い言より

御  
御か行くと 御い言より

御  
御わらわらふありけり

御  
御わらわらふ

御  
御若若 御い言より 御十九三信之れ

御  
御わらわらふ

御  
御わらわらふ

御  
御わらわらふ

御  
御わらわらふ

御  
御わらわらふ

御  
御わらわらふ

御  
御わらわらふ

御  
御わらわらふ

御

御  
御わらわらふ

御  
御わらわらふ

御  
御わらわらふ

御  
御わらわらふ

御  
御わらわらふ

御  
御わらわらふ

御  
御わらわらふ

御  
御わらわらふ

御  
御わらわらふ

御  
御わらわらふ

御  
御わらわらふ

御  
御わらわらふ

御  
御わらわらふ

御  
御わらわらふ

御









何延氏三正十八御記云賭り訖方大臣向其亦百厄近寔  
以下其賭り勝率至其亭一

秘 子さいつののいれれとまぐ  
心ん中まのい腹也

いめたわあうりよりりやれと  
秘 いお神左太よりりてるるの太駄后勝て後會親より

常の勝やまそいめとつり共  
凡地合に皆左の勝を中とまはる合と第一の番所の

字以付ると故文とすいお神左と後合親とつてこ  
お左の勝也おれい今多分の例よ但て例とんり

とつりつておまうとれ共 少曹左太おや  
ら場取の例るうんりあしれ中つ考して通也

定行る事也

吾々常陸文をうれぬの文  
句吾々常陸曰文又云 中あつて  
心ん中まの腹

うお中ねい

秘 意の者しまけるるあるれとわたりわたりれきつりり  
いゆと

おとめ 母三條上  
母三條上

秘 車 嫡男  
二男  
三男  
い子れ中同考指中納て右大弁

少曹の者よりり  
あつねりしきり

子のおとれしよと中おつりたりけぬ常  
心ん一の序中お奥の方とて就とてつて端より

そとに垣下の序とて中おつりて答直する請伴の  
心ん

あんののみこ 心ん  
心ん  
何垣下らんことんりたり

秘 垣下に法伴也  
りともこやひ





⑤ 秋のますに求子の二股也右にすけはらりたるの好く入り  
うまい結句の草花も春の好くし草花はあはれ

⑥ 秋のますに 求子奇 未史又云風俗

⑦ 秋のますに 求子奇の歌のこころ

⑧ 秋のますに 求子奇二股のちりはれり

⑨ 秋のますに 求子の歌ありて草花もまらひきこ

⑩ 秋のますに 求子の歌ありて草花はよむり

⑪ 秋のますに 求子の歌ありて草花はよむり

⑫ 秋のますに 求子の歌ありて草花はよむり

⑬ 秋のますに 求子の歌ありて草花はよむり

⑭ 秋のますに 求子の歌ありて草花はよむり

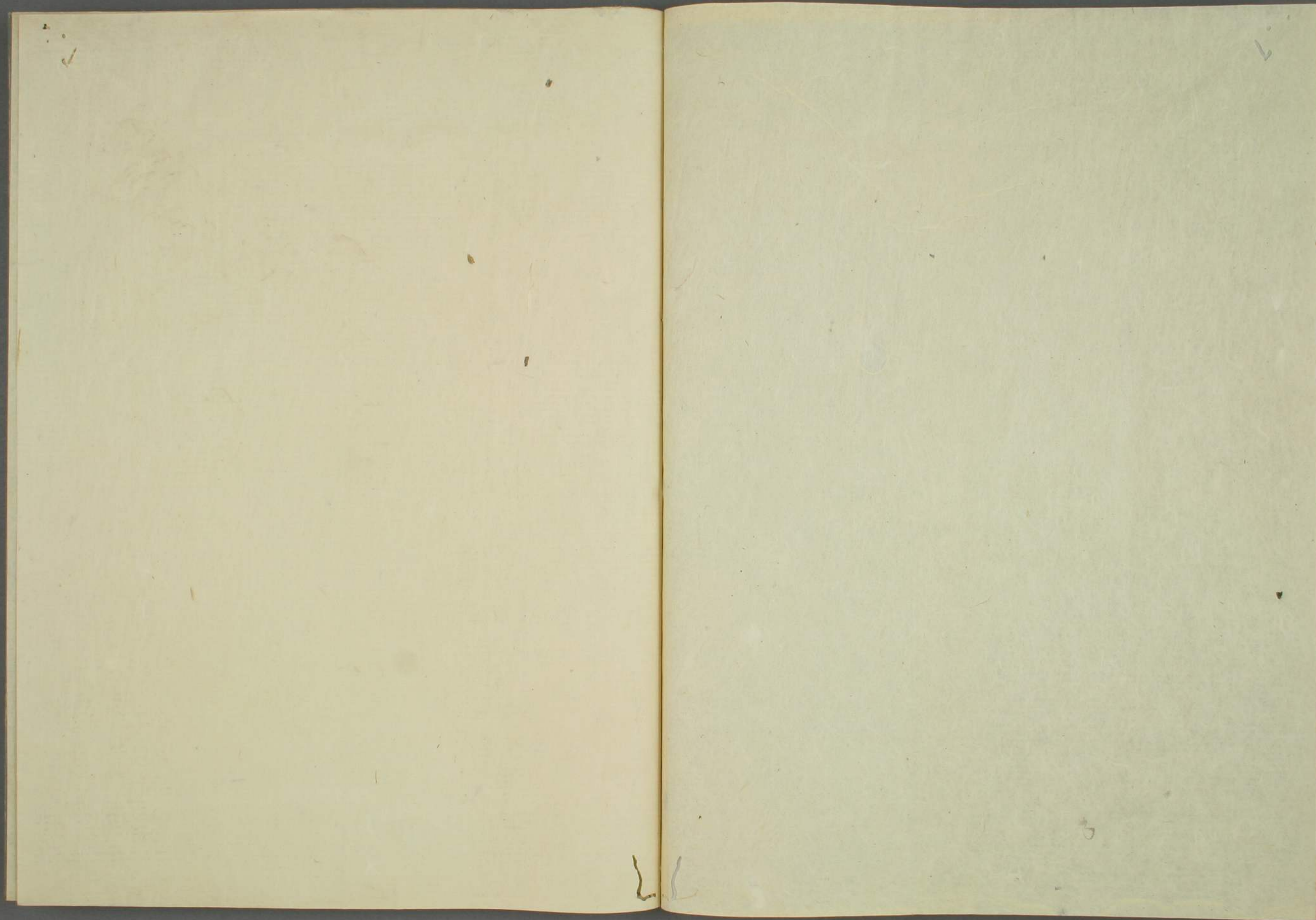
⑮ 秋のますに 求子の歌ありて草花はよむり

⑯ 秋のますに 求子の歌ありて草花はよむり

⑰ 秋のますに 求子の歌ありて草花はよむり

⑱ 秋のますに 求子の歌ありて草花はよむり

い春のまらりと一ツを好くし



Handwritten text in Arabic script, mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side. Some faint characters are visible in the top left corner.

Handwritten text in Arabic script, mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side. Some faint characters are visible in the top right corner.

Handwritten text at the bottom center of the gutter, possibly a signature or a date.

